

バリ・ヒンドゥー村落の近隣集団

—タバナン県グヌンサリ慣習村の2つの部落（バンジャール）の事例—

永野由紀子

Pluralistic Collectivism of Neighborhood Organizations in Balinese Village : The Case of two communities (Banjar) in Desa Adat Gunungsari, Jatiluwih, Bali

NAGANO, Yukiko

要旨：本稿の目的は、タバナン県ジャティルイ村にあるグヌンサリ慣習村を事例に、ポスト・スハルト期のバリ・ヒンドゥーの近隣集団の特質を明らかにすることである。バリ・ヒンドゥーにとって身近で重要な近隣集団は、村（デサ）と部落（バンジャール）である。村と部落は、行政（ディナス）と慣習（アダット）の二元性をもつ。本稿の考察から、ポスト・スハルト期の分権化のなかで、行政的要素と慣習的要素が混在し、多元的集団構成が揺らいでいる状況が示された。さらに、生活の基盤が現金収入になり、村外メンバーが増えたことで、バリ・ヒンドゥーの村落の生活は大きく変容している。世界遺産の登録がもたらす観光収入の増大は、こうした傾向に拍車をかける。

こうした変化と同時に、本稿の事例からは、今日でもなお部落（バンジャール）が、親族関係が重層する凝集力の強いバリ・ヒンドゥー固有の近隣集団であることが明らかにされた。バリ・ヒンドゥーの部落には、ダディアや屋敷地共住集団という父系的な親族結合に加え、部落内婚が多いので、父方・母方双方の親族関係が重層している。これらを包摂しつつ、部落は、葬送儀礼を中心に、通過儀礼と寺院の祭礼のための相互扶助をおこなうバリ・ヒンドゥー固有の近隣集団として今日も機能している。

キーワード：バリ島、ヒンドゥー、部落（バンジャール）、慣習村、慣習（アダット）

はじめに

本稿では、タバナン県ジャティルイ行政村（以下、形容詞が見つからない村は、行政村を指す）にあるグヌンサリ慣習村内の2つの慣習部落を事例に、ポスト・スハルト期のバリ島の慣習村（デサ・アダット）¹⁾と慣習部落（バンジャール・アダット）に着目し、バリ・ヒンドゥー村落の近隣集団の特質を明らかにする。慣習村と慣習部落（以下、形容詞が見つからない部落は、慣習部落を指す）のメンバーシップ、治安維持団（プチャラン）・青年団、葬式組・父系的親族集団（ダディア）など慣習村と部落内の集団について分析する。これらをとおして、バリ・ヒンドゥー村落の慣習村と部落（バンジャール）の機能と両者の関連について考察する。

1. 先行研究と本研究の位置づけ

バリ村落についてよく知られた代表的な研究者は、人類学者のクリフォード・ギアツである。C・ギアツは、

バリ村落の固有性を、多元的集団構成 (pluralistic collectivism) と称した (Geertz, C 1963: 85)。多元的集団構成とは、機能ごとにいくつもの集団を重ねて構成する集団形成のあり方を指す。ギアツは、このような集団構成の原理をスカ (Seka) にもとめている (Geertz, C 1963: 83-6, Geertz, H and Geertz, C 1975: 30=1989: 38-39)。スカとは、どのような種類のものであれ、組織された集団ないしは組合を一般的に表すバリ語で、「ひとつになったもの」を意味する。それゆえ、バリ村落では、部落（バンジャール）も水利組合も各種の寺院の信徒集団も青年団もアリサン（無尽講）も稲刈りグループも民俗音楽の合奏団や民俗舞踊団も、あらゆる種類のあらゆる集団をスカと称する。「あらゆる目的のためにそれぞれ独立した集団があり、しかもひとつの集団の目的はただひとつである」 (Geertz, H and Geertz, C 1975: 30=1989: 38)。つまり、ひとつの集団が、複数の機能や目的を兼ねることはない。ひとつのスカのなかでは、それ以外のところでの地位が何であっても、成員は基本的に平等な権利と義務をもつ。ほとんどの集団の意思決定は、全員の合意による満場一致の原則で運営される。このような合意形成のなかでつくられた各集団のルール

が慣習法（アウイグ・アウイグ）である²⁾。それぞれのスカはより大きな組織の一部ではなく独立して存在する。各スカは、他の社会的なつながりやその影響から自由で、他の制度とかかわらない自律性をもつ（Geertz, H and Geertz, C 1975: 4-8=1989: 5-10）。

ダディア（dadia）というバリ・ヒンドゥー特有の親族集団の存在をクローズアップしたのもギアツ&ギアツである。ギアツ&ギアツは、ダディアを「男系的で、内婚が好まれ、何らかの理由で一人の共通の祖先の子孫であることを信じる人々からなる非常に団体的 corporate 性格の強い集団」（Geertz, H and Geertz, C 1975: 5=1989: 6）と説明する。間亭谷は、「ある村にこの集団が存在するか否か、重要な機能を果たしているか否かによって、村の構造、機能は大きな影響を受ける」（間亭谷 2000: 156）と述べている。

バリ村落の多元的集団構成のなかで、もっとも重要な次元は慣習（アダット）と行政（ディナス）の二元性である³⁾。それゆえ、村（デサ）も部落（バンジャール）行政村と行政部落、慣習村と慣習部落という二元性をもつ。水田稲作に関わる機能は、村（デサ）や部落（バンジャール）から切り離された水利組合（スバック）の管轄である。バリ・ヒンドゥー村落の多元的集団構成のなかで、慣習村と部落の機能は、①農業生産次元の機能（水利組合スバック）から区別され、②地方行政機構の末端としての行政次元の機能（ディナス）からも区別されて、③慣習的・宗教的・文化的機能に特化している。

本稿は、ポスト・スハルト期のバリ・ヒンドゥー村落

の慣習村（デサ・アダット）と慣習部落（バンジャール・アダット）に着目し、慣習村内の各種の集団や組織、メンバーシップ、部落内のダディアの範囲や影響力を分析する。これらをとおして、農業生産に関わる機能から切り離され、行政次元の村や部落（行政区）の機能からも区別された慣習村と慣習部落の今日的様相を明らかにし、バリ・ヒンドゥー村落の近隣集団の固有性を検証する。

2. 対象地域の概況と調査方法

本稿でとりあげるのは、ジャティルイ村にあるグヌンサリ慣習村内のグヌンサリ・デサ部落とグヌンサリ・ウマカユ部落という2つの部落である。ジャティルイ村は、バトゥカウ山の山麓に広がる棚田地帯である。標高700から1000メートルに位置する。州都デンパサール市の官庁街まで47キロメートル、タバナン県役場まで26キロメートル、プヌブル郡役場まで13キロメートルの距離である。ジャティルイ村は、観光ルートからはずれており、よく管理された棚田の景観が広がる農村である（永野 2012）。しかし、2012年にバリ・ヒンドゥーのスバック・システムがバリ州初の世界遺産に登録され、ジャティルイ村の棚田がそのシンボルとして世界的にも注目されるようになってから、観光客が激増し、短期間で大きく変貌している（永野 2016）。

ジャティルイ村の2017年5月時点の人口は2,834人、夫婦組数は889である（表1）。ジャティルイ行政村内にはグヌンサリ慣習村（人口1,128人、夫婦組数330）と

表1 ジャティルイ行政村の人口と世帯数

単位：組、人

	部落（バンジャール）	夫婦組数	人口
グヌンサリ 慣習村	グヌンサリ・デサ（行政・慣習）	148	512
	グヌンサリ・ウマカユ*（行政・慣習）	97	338
	南グヌンサリ*（行政）	85	278
小計	3 行政部落（行政）・2 慣習部落（慣習）	330	1,128
ジャティルイ 慣習村	東ジャティルイ（行政・慣習）	127	443
	西ジャティルイ（行政・慣習）	147	394
	クサンビ（行政・慣習）	90	293
	北クサンバハン（行政・慣習）	87	259
	南クサンバハン（行政・慣習）	108	317
小計	5 行政部落（行政）・5 慣習部落（慣習）	559	1,706
合計	8 行政部落（行政）・7 慣習部落（慣習）	889	2,834

出典：ジャティルイ村役場の住民基本台帳（2017年5月）より作成。

*グヌンサリ・ウマカユ部落は慣習部落としてはひとつである。だが、行政部落としては、人口が多いため、2010年5月にグヌンサリ・ウマカユ慣習部落の範囲を、グヌンサリ・ウマカユ行政部落と南グヌンサリ行政部落に二分された。

ジャティルイ慣習村（人口1,706人、夫婦組数559）という2つの慣習村がある。グヌンサリ慣習村には2つの慣習部落があり、ジャティルイ慣習村には5つの慣習部落がある。グヌンサリ慣習村の水田開発のほうがジャティルイ慣習村より早く、歴史が長い。だが、人口と部落数は、ジャティルイ慣習村のほうがグヌンサリ慣習村より多い。このため、この2つの慣習村は、ジャティルイ行政村のなかでマジョリティとマイノリティの関係にあり、予算の配分や利権をめぐる軋轢がある。本稿の考察の対象は、グヌンサリ慣習村（人口1,128人、夫婦組数330）のなかのグヌンサリ・デサ部落とグヌンサリ・ウマカユ部落という2つの部落である。

本稿は、2009年から2017年にかけて実施したグヌンサリ慣習村の慣習村長（この間3人交代）を中心に、慣習的治安維持団長、慣習部落長、ジャティルイ行政村長（2人交代）、婦人会長、青年団員等々を対象者に実施した半構造化インタビュー調査にもとづいている。

3. ジャティルイ村における慣習と行政の二元性

表2は、慣習（アダット）と行政（ディナス）の二元性のもとで、ジャティルイ村の村（デサ）と部落（バンジャール）が、それぞれどのような機能を担っているかを示したものである。行政次元の村と部落の関係は、インドネシア政府の行政機構である中央政府→州→県→村（デサ）→区（ドゥスン）という地方行政機構の末端の行政村（デサ・ディナス）と行政区（行政部落）に位置づけられる。つまり、行政村と行政部落は、官製組織における上位下位、全体部分の関係にある。行政次元の部

落は、住民の人口登録（結婚・離婚、出生、死亡、転出入）を受け付けて集計する行政村の補助的機能を果たしている。それ以外に、村議会（BPD）や婦人会（PKK）や青年団や行政的治安維持団（ハンシップ）など官製組織の役員やメンバーを推薦する選出母体になっている。なお、このような行政次元の部落の機能は、インドネシアのドゥスン（行政区・行政村落）と一致する。バリ・ヒンドゥーの村落では、行政村の下部組織としての機能を、部落（バンジャール）の範囲が担っている。

バリ州の大多数を占めるバリ・ヒンドゥー固有の近隣組織は、慣習村と慣習部落（バンジャール・アダット）である。慣習村は、バリ・ヒンドゥーに共通する3つの寺院（カヤンガン・ティガ）や埋葬地を共有し、寺院の管理や祭礼をおこなう信徒集団である。慣習部落は、慣習村の下部組織というよりも、埋葬儀礼や火葬儀礼の相互扶助組織であり、210日を1年とするウク暦にもとづく3つの寺院の周年祭をはじめ、太陰暦（サカ暦）によるニュピ（静寂の日）やガルンガン・クニンガン（神々や祖霊の降臨）といった祭礼の準備や運営のための共同作業の実行単位である。行政村とは異なる慣習次元の組織として、慣習村には慣習村長（ブンデサ）と秘書と会計の三役がいる。3つの寺院に付く各寺院祭司（ジェロマンク）もいる。また、慣習的治安維持団（プチャラン）や青年団などの組織がある。葬送儀礼の共同作業をはじめ慣習村の3つの寺院の維持補修のための集金や祭礼の準備や共同作業を実際に担うのは、部落である。それゆえ、慣習村と慣習部落の関係は、行政村と行政部落の関係のように、上位下位の関係とは言えない⁴⁾。

表2は、ジャティルイ村における慣習次元と行政次元

表2 ジャティルイ村における慣習（アダット）と行政（ディナス）の二元性

2017年7月時点

	慣習（アダット）次元	行政（ディナス）次元
	慣習村	行政村
村（デサ）次元	慣習村長—秘書—会計 3つの寺院の維持・管理・祭礼 共同埋葬地 慣習的治安維持団（プチャラン） 青年組織 集会所	地方行政の末端機構 行政村長（17歳以上の住民の直接選挙） 村議会（BPD）〔行政村長の妻+慣習村長（各1人×2）+部落代表（各1人×8行政部落=計11人）〕 行政的治安維持団（ハンシップ） 婦人会（PKK）（5人×8部落） 観光運営マネジメント組織 青年団
部落（バンジャール）次元	慣習部落（バンジャール・アダット） 葬送儀礼の相互扶助組織 慣習村寺院と集会所寺院の祭礼の準備作業〔青年組織〕	行政部落（バンジャール・ディナス） 人口登録（結婚・離婚・出生・死亡・転出入）

の村と部落の組織や機能である。ジャティルイ村に固有というより、大半はバリ・ヒンドゥーの村落に共通する。部落集会所（バレ・バンジャール）は、名前の通り、各部落単位で所有し、利用することが多い。グヌンサリ慣習村では、名称は部落集会所だが、2つの慣習部落が共同利用する慣習村の共有物である。また、ジャティルイ村に特有の組織としては、世界遺産登録後の2014年に設置された観光運営マネジメント組織がある。この組織は、ジャティルイ村の棚田が世界遺産のシンボルとして注目されるようになり、観光客が激増するなかで、入場料の管理や配分、駐車場や道路やトレッキング・コースやトイレの整備、土地開発の管理など観光事業の企画と運営を目的として設置された。この組織のメンバーとして、行政村長や行政部落から選出された者以外に、水利組合長（プカセ）と慣習村長がいることに留意したい。村協議会（BPD）のメンバーにも慣習村長が含まれている。ひとつの集団の目的はひとつとする多元的集団構成から見ると、行政次元の集団の中に慣習村や水利組合の役職者がいるのはおかしい。しかし、ポスト・スハルト期のバリ州の地方行政機構には、水利組合や慣習村の代表者が関与している（永野 2016）。

4. グヌンサリ慣習村の2つの慣習部落： グヌンサリ・デサ部落とグヌンサリ・ウ マカユ部落

4-1 集落と慣習村の共有物

グヌンサリ慣習村は、ジャティルイ村の東側にあり、村役場まで5キロ程度離れている。集落の山（北）側に、村の寺院と中心の寺院、南側に冥界の寺院と埋葬地がある（図1）。埋葬地の向かい側には、ジャティルイ第二小学校がある。この小学校は、1968年に慣習村の通学区はグヌンサリ慣習村の2つの慣習部落の児童である。ジャティルイ村は小学校が3つある。だが、中学校はひとつもない。このため、中学生になると隣村にあるスガナン中学校にバイクで通学する。中学生以上の住民はほぼ全員バイクを所有しており、ジャティルイ村での生活にバイクは不可欠である。

2つの部落は、村役場に続く主要道が集落を東西に横断するが、屋敷地が南北に連なり、外観上はひとつのまとまりをもった集落に見える。山（北）側にある19の屋敷地がグヌンサリ・デサ部落、南側にある9つの屋敷地がグヌンサリ・ウマカユ部落である。集落を南北に縦断する道路をはさんで西側と東側の屋敷地が向かい合うかたちで並ぶ。

4-2 屋敷地と山林（畑）に点在する宅地（ポンドック）

グヌンサリ・ウマカユ部落は、夫婦組数182、人口616人（2017年5月時点）（表1）。グヌンサリ・デサ部落は、夫婦組数148、人口512人である。人口や世帯数は、グヌンサリ・ウマカユ部落のほうがグヌンサリ・デサ部落より大きい。だが、集落の屋敷地は少ない。その理由は、グヌンサリ・ウマカユ部落の半数以上のメンバー（夫婦組数97、人口338人）が、集落にある9つの屋敷地から分出して、山林の畑を宅地にして居住しているからである。グヌンサリ・ウマカユ部落の住民が所有する水田は、標高700メートルの場所にある集落よりも高い位置（最高は標高1000メートル）にある。農作業の便宜上、集落の屋敷地から水田に行くより、山の畑地を新しい宅地（新しい屋敷地）にして家屋を新築して居住するメンバーが多い⁵⁾。バリ島の畑は、バナナやコーヒーやドリアン等の果樹や野菜栽培、建築材、家畜の飼料や燃料や肥料、自家用野菜の供給地である。山林の畑の宅地は、家屋や屋敷地が集住する集落ではなく、標高700～1000メートルの山林に点在している。グヌンサリ・デサ部落にも19の屋敷地から分出した宅地が若干ある。畑の宅地はポンドック（小屋）と呼ばれているが、集落よりも広い屋敷地に大きく立派な家屋が建てられている。

山麓に点在するポンドックの住民の大半は、グヌンサリ・ウマカユ部落の9つの屋敷地のいずれかに出自をもつ。慣習上も行政上もひとつの部落（バンジャール）であったが、人口が大きいので、2010年5月にグヌンサリ・ウマカユ行政部落（山林の畑に点在する宅地）と南グヌンサリ行政部落（集落の9つの屋敷地）の2つに分けられた。この行政部落（バンジャール・ディナス）の分割によって、慣習部落（バンジャール・アダット）としてはひとつのグヌンサリ・ウマカユ部落のままであるが、行政部落としては2つになった。

このような行政区画の変更は、円滑に遂行され、慣習部落の住民に抵抗なく受けいられているように見える。というよりも住民にむしろ歓迎されているように見えた。行政上の部落は、住民の代表を選出する単位であり、予算の配分比率に影響する。その意味では、グヌンサリ慣習村内の行政部落の数が2から3に増えたことは、5つの行政部落から成るジャティルイ慣習村に対して、グヌンサリ慣習村の発言権や予算配分を増やすことにつながる。もちろん、ジャティルイ慣習村とグヌンサリ慣習村の行政部落の数が、5対2から5対3に増えても、行政村のなかでのマジョリティとマイノリティの立場が変わるわけではない。事実、調査期間中に、選挙が

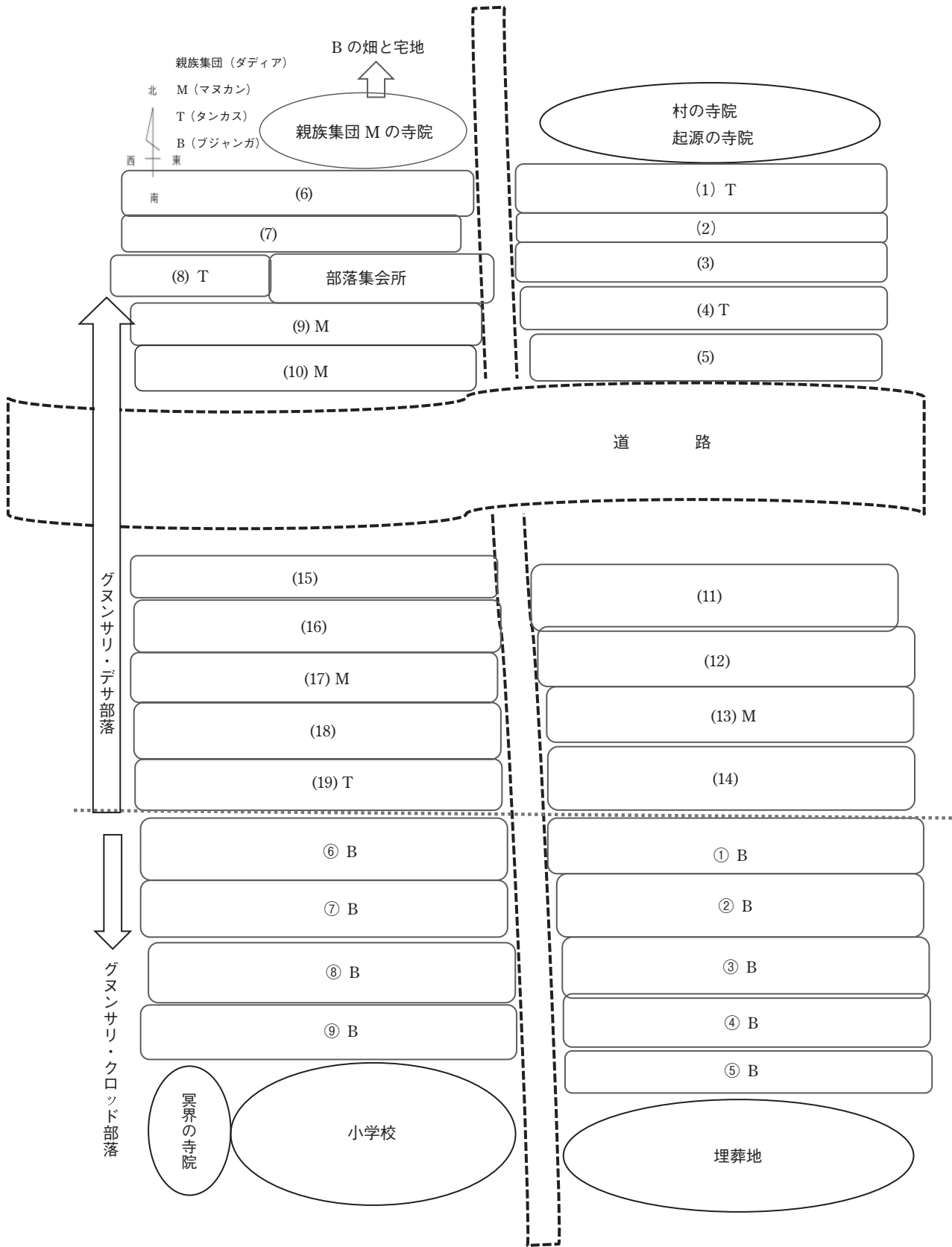


図1 グマンサリ慣習村の集落と屋敷地

あり、行政村長が交代した。2002年から2期務めた前任者も、2013年に就任した新行政村長も、ジャティルイ行政村の住民である。

ひとつの慣習部落が、規模に応じて2つの行政部落に分割されることは、この時のジャティルイ村では、2つの慣習村間の対立を緩和し、人口や世帯数を反映した均衡をもたらすうえで効果をもったといえよう。同時に、行政機構としての部落の分割が、慣習上の部落の一体感および宗教上・文化上の活動や行事の円滑な遂行にストレートに影響するものではないことも語っていよう。

5. 親族集団（ダディア）・身分階層（カスタ）・通婚圏

5-1 親族集団と部落（バンジャール）

グヌンサリ慣習村を構成するグヌンサリ・ウマカユ慣習部落とグヌンサリ・デサ慣習部落は、バリ・ヒンドゥーの身分階層（カスタ）と親族集団（ダディア）が部落生活に占める比重が異なる。グヌンサリ慣習村の2つの慣習部落は、このダディアの数と範囲、意味と影響力が、それぞれ異なる。

グヌンサリ・ウマカユ部落の9の屋敷地の親族および山林の宅地の親族は、全員ひとつのダディア・ブジャンガ（図1でBと表記した屋敷地）のメンバーである。称号集団ブジャンガは、オランダ植民地政府が身分階層を固定化したので平民に分類された。だが、ブジャンガは、ジャワ・ヒンドゥーのマジャパイト王国がバリ島に侵攻する14世紀以前の王朝の貴族層に属する称号集団とされる⁶⁾。グヌンサリ・ウマカユ慣習部落のブジャンガの出自は、タバナン県マルガで、開墾のために移住してきたとされる。グヌンサリ・ウマカユ部落にはブジャンガのダディア寺院がある。

グヌンサリ・デサ部落は、いろいろな出自をもつ移住者の集合体である。19の屋敷地のうち12の屋敷地の住民は、どの親族集団（ダディア）にも属していない。親族集団は2つで、ダディア・マヌカンとダディア・タンカスである（図1でMとTと表記した屋敷地）。ダディア・マヌカンは4つの屋敷地（9,10,13,17）の出身者で、起源の寺院と村の寺院の向かい側にある大きなダディア寺院を共有する。ダディア・タンカスのメンバーは、3つの屋敷地（1,4,19）に出自をもつ。屋敷地（4）が中心で、親族の起源の大きな屋敷寺院がある。山林の宅地（ポンドック）とジャティルイ慣習村（クサンビ部落）の屋敷地にもメンバーがいる⁷⁾。ダディア・マヌカンは、慣習村の3つの寺院に伍する大きなダディア寺院

を集落の山側にもつことから、経済力のある有力な親族集団であったことが分かる。1970年代には行政村長をだすほど政治力がある親族集団だった。だが、今は農地の面積も小さく、有力な親族集団とはいえないと地元では語られる。

なお、調査期間中に慣習村長は2人交代した。最初の調査協力者である慣習村長は、グヌンサリ・デサ部落の住民で、タンカス親族集団のメンバーである。2007年に就任し、任期は2012年である。任期途中の2010年に役を降りることになった。その後、2010年から2016年まで、グヌンサリ・ウマカユ部落のブジャンガ親族集団のメンバーが慣習村長を務めている。2016年からは、グヌンサリ・デサ部落のタンカス親族集団のメンバーが就任している。なお、2007年に就任した慣習村長の前任者は、グヌンサリ・ウマカユ部落のブジャンガ親族集団の一員である。偶然かもしれないが、2つの慣習部落が交替で慣習村長をだしているように見える。4人の慣習村長が、ブジャンガ親族集団とタンカス親族集団のメンバーであることから、親族集団（ダディア）と政治力は不可分で、政治的な威信の背景には経済力が必要とされていることもうかがえる。

5-2 親族集団と身分階層（カスタ）

グヌンサリ・デサ部落の住民は、2つのダディアのメンバーも含めて全住民が平民層である。グヌンサリ・ウマカユの住民は、全員称号集団ブジャンガの一員で、ブラフマナ階層とされる。バリ・ヒンドゥーの身分階層（カスタ）は、人口の10%を占める貴族層（ブラフマナ、サトリア、ウェシア）の3つを上位階層として総称する身分階層と90%を占める平民層（スードラ）である。バリ・ヒンドゥーの平民層は、被差別民や従属身分ではない。大多数を占める平民で、あくまで社会的な役割上の区別として語られる。誇りをもって自らを平民（スードラ）と語る人も少なくない。上位階層の屋敷寺院はムラジャン、平民層の屋敷寺院はサンガといい、上位階層と平民層との間ではバリ語の言葉遣いやふるまいが異なる。カスタを超える婚姻には規制があり、上位階層の男性と平民層の女性の結婚は、上昇婚として許容されるが、上位階層の女性が平民層の男性と結婚するのはタブーである。

グヌンサリ慣習村では、2つの部落の屋敷寺院を、上位階層と平民層の名称区分にしたがって、グヌンサリ・ウマカユ部落の屋敷寺院をムラジャン、グヌンサリ・デサ部落の屋敷寺院をサンガと呼ぶ。慣習村の会計簿に記

載されるメンバーの名前につける敬称も、グヌンサリ・デサ部落のメンバーはパツ (Pa) をつけ、グヌンサリ・ウマカユ部落のメンバーは指導者を意味するグル (Guru) という敬称で区別される。言葉遣いやふるまいも異なり、グヌンサリ・ウマカユ部落の住民に対してグヌンサリ・デサ部落の住民は、上位階層に対する丁寧な言葉遣いやふるまいがなされている。

グヌンサリ・ウマカユ部落の住民が、全員、バリ・ヒンドゥーの上位階層とする住民の説明をすぐに受け入れたわけではない。上位階層だったが政変や移住の際に身分を偽って平民として村で生活しているという類の日本の落人伝説にも似たダディアの出自についての説明を耳にしがちだからである。グヌンサリ・デサ部落のダディア・マヌカンも、移住前はウェシア階層だったが、王朝時代の戦争に負けたので村で平民として生活するようになったと出自を語る。バリ・ヒンドゥーのブラフマナ階層にはイダという称号がつく。グヌンサリ・ウマカユ部落のブジャンガには、イダという称号がない。

バリのブラフマナ階層の象徴ともいえるイダという称号がないことは、ブジャンガが、オランダ植民地政府が固定したマジヤバイト王国時代の貴族層ではなかったことで理解できる。バリ・ヒンドゥーの親族集団 (ダディア) や身分階層 (カスタ) が分かりにくいのは、称号集団ブジャンガが、どの地域社会でもつねに上位階層として扱われるわけではないことである。称号集団ブジャンガは、バリ島の各地にいる。ダディアが形成されている場合でも、その範囲や影響力は多様である。身分階層が問われるのは出身村のバリ語の世界なので、村外での生活が広がった今日、日常的には大きな問題にならない。問題がでてくるのは、結婚の場面である。

5-3 部落と通婚圏

2つの部落は、どちらも結婚に際して夫方の屋敷地に居住することが基本である。農地や屋敷地は男子分割相続が原則なので、屋敷地には父方親族が共住している (永野 2022)。ただし、タバナン県は、息子がいない場合、娘に婿をもらう慣行がある。このため、屋敷地に共住するのは父方親族とは限らない。2つの慣習部落は、このような居住や相続の慣行において共通である。

バリ・ヒンドゥーの結婚は、進学や就職で村を離れることが多かった今でも、慣習部落内の結婚が多い⁸⁾。グヌンサリ慣習村にある2つの慣習部落もまた、部落内の婚姻が多い。図2は、グヌンサリ・ウマカユ部落の屋敷地⑧ (図1) に居住する親族である。インタビュー対象者 (1976年生、2013年8月のインタビュー当時37才) は、タバナン県の非常勤職員で、ジャティルイ村の入り口で観光客から入場料を徴収する仕事をし、屋敷地の前の道路に面した雑貨屋を母と2人で経営している。屋敷地には、本人家族 (本人、母、本人の子供2人の4人) が居住する家屋も含めて家屋が4棟ある。本人の父は、6人キョウダイ (長姉、長兄、次姉、父、弟、妹) の第4子で男子3人の2番目 (次男) である。1棟の家屋には、本人の伯父 (長兄) とイトコ (父の長兄の次男) の家族計5人が居住している。もう1棟には、もうひとりのイトコ (父の長兄の長男) 家族4人。もう1棟には、本人の義叔母 (父の弟の妻で寡婦) 1人が居住する。

伯母 (父の長姉) の婚出先は、グヌンサリ・ウマカユ部落の山林の宅地 (ポンドック) である。もうひとりの伯母 (父の次姉) は、グヌンサリ・ウマカユ部落の集落の屋敷地④ (屋敷地⑧の斜め向かい) である。叔母 (父の妹) も、グヌンサリ・ウマカユ部落の集落の屋敷地③

インタビュー対象者 (1976年生)

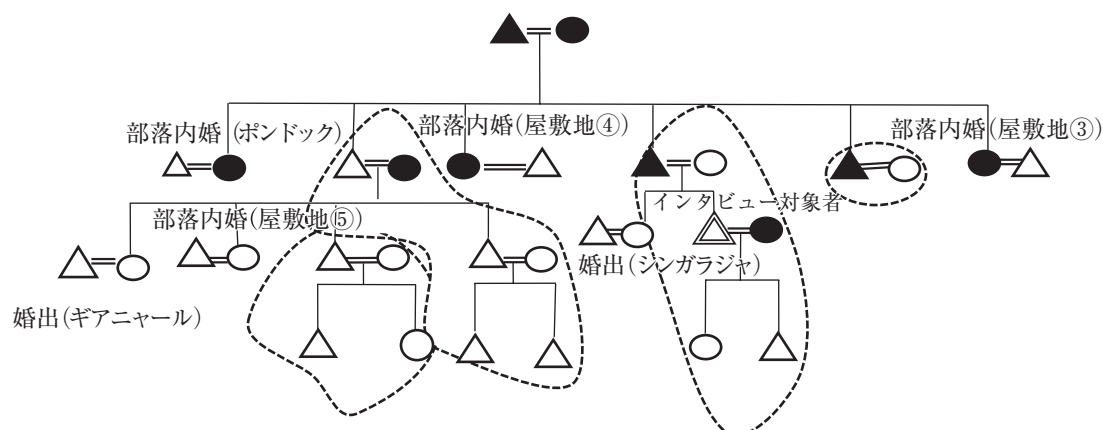


図2 グヌンサリ・ウマカユ部落の屋敷地⑧ (ダディア・ブジャンガ、2013年8月時点)

(屋敷地⑧の向かい)に嫁いでいる。父の姉妹3人全員が部落内婚である。60年代70年代までは、部落内婚が多かったが、80年代になると都市の学校への進学や就職のため村外での出会いの機会が増える。本人の世代に目を向けると、本人の姉は、結婚してシンガラジャに住んでいる。イトコ（本人の父の長兄の長女）も、結婚してギアニヤール県に住んでいる。もうひとりのイトコは、同じ部落の屋敷地⑤に嫁いでいる。

グヌンサリ・ウマカユ部落の女性の婚出先に部落内が多いのは、部落内婚や親族集団（ダディア）内の婚姻が好まれるというバリ・ヒンドゥーの一般的な傾向に加え、身分階層（カスタ）とも関わる。結婚をめぐるしきたりで、男性が自分より低い階層の女性と結婚することはできるが、女性が自分より低い階層の男性と結婚することはタブーである。このしきたりを無視して身分違いの結婚した場合、自分の階層が下がるだけでなく、生家とのつながりも絶たれることになる。このルールは、上の階層の女性ほど、結婚相手を選択する幅が狭まることを意味する（中谷 2014）。

部落内婚が多いのは、グヌンサリ・ウマカユ部落だけではない。図3は、グヌンサリ・デサ部落の屋敷地(13)に居住するダディア・マヌカンの家族である。インタビュー対象者（1968年生の女性）は、夫婦で農業をしている。娘5人の末娘。3人の姉が婚出したので、自分が婿をもらうしかなかった。夫はギアニヤール県の出身。ウダヤナ大学の学生時代に知り合って結婚した。長姉は結婚してスラウェシ在住。次姉は死亡。三姉（1959年生）は、グヌンサリ・デサ部落の屋敷地(1)の男性と結婚。フローレンスやデンパサールで電話局の仕事をしていたが、早期退職して地元に戻り農業をしている。四姉は、グヌンサリ・デサ部落の隣の屋敷地の男性と結

婚し、農業している。姉2人の嫁ぎ先は部落内ではあるが、ダディア・マヌカンの屋敷地ではない。

このインタビュー対象者のように、タバナン県では、男子がいない場合、娘に婿をもらう慣行が広がっている。このため、バリの学校や職場では、タバナン県出身の女性と交際すると婿になる覚悟が必要といわれ、敬遠されがちである。バリの結婚で重視されているのは恋愛である。それゆえ離村の機会が増えたことで、どちらの慣習部落も、村外の就労先や学校での出会いをきっかけに結婚するケースが増えている。にもかかわらず、今日でもなお、グヌンサリ・ウマカユ慣習部落もグヌンサリ・デサ部落も、部落内の結婚が多い。離村していても、寺院の祭礼や通過儀礼のための帰省が、未婚の男女の出会いの場になっている。

部落内婚に次いで多いのは、実家との行き来がしやすく、慣習が似ている近隣の部落や慣習村内の結婚である。それゆえ慣習部落内の結婚に次いで、慣習村内の結婚が多くなる。グヌンサリ・デサ部落の住民と隣のジャティルイ慣習村内の部落の住民との結婚はある。屋敷地(1)に嫁いだ三姉夫婦の娘も、隣のジャティルイ慣習村の男性と結婚している（図3）。だが、グヌンサリ慣習村内の2つの部落間の結婚の話は聞かない。また、親族集団（ダディア）内の結婚が好まれるとされているが、グヌンサリ・デサ部落のダディア・マヌカンやタンカスのような範囲が小さい親族集団の場合、そのような傾向はなかった。

6. 慣習村と部落（バンジャール）の成員資格

6-1 成員資格と既婚夫婦の役割

グヌンサリ・デサ部落とグヌンサリ・ウマカユ部落の

◎ インタビュー対象者（1968年生）

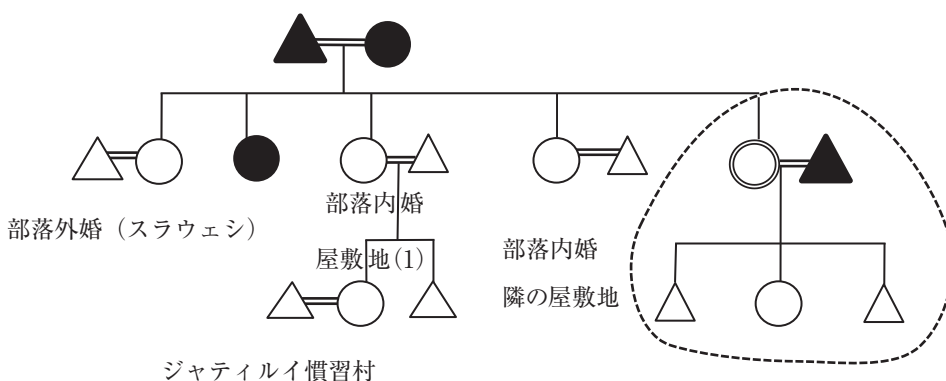


図3 グヌンサリ・デサ部落の屋敷地⑬の結婚（ダディア・マヌカン、2012年8月時点）

成員資格は、一組の既婚夫婦である。慣習村も部落と同様、一組の夫婦を構成単位とする。慣習村の構成単位は、個人ではなく部落（バンジャール）であるという見解がある（吉田編 1992: 64-65）。慣習村がメンバーを直接承認するわけではなく、部落がメンバーとして認めた一組の夫婦が慣習村のメンバーになり、実質的な活動の采配は各部落に任されるという意味では、慣習村の構成単位は、部落といえよう。部落の屋敷地を出自とする未婚男性が結婚することで慣習部落の正式なメンバーになる。このような成員資格は、バリ・ヒンドゥーに共通である。バリ・ヒンドゥーの村落では、ヒンドゥー寺院の祭礼や各種の通過儀礼に際して、既婚男性の役割と既婚女性の役割が明確に定められている。既婚男性の役割は、会場設営や飾り物や竹籠づくりや儀礼食づくりである。日常の食事の調理は女性が担当するが、大きな儀礼の際に供される豚の丸焼き（パビグリン）や焼き鳥などは、男性が屠殺して調理し、共食に供される。

女性の役割は供物をつくることである。亜熱帯の色鮮やかな果樹を芸術的に盛りつけた供物を頭上に掲げて、正装に身を包んで寺院に運ぶバリの女性の姿は良く知られている。供物づくりに使う材料の米やお菓子の材料や調理法は、祭礼や儀礼の種類によって細かく定められている。寺院の祭礼の際の供物づくりのルールは、寺院祭司（ジェロマンク）の指導をうけてつくられる。大きな儀礼の際には、バナナやココナッツの葉の容器づくりにはじまり、容器につめるさまざまな供物の調達や調理のため、かなり前から準備作業を始める。屋敷地内の集会所には、日常の供物の準備はもとより祭礼や儀礼の供物の準備をする女性たちの姿をよく見かける。夫婦一組で、既婚男性と既婚女性がそれぞれの役割を果たすことではじめて一人前の慣習部落の構成員とみなされる⁹⁾。

慣習村に寺院が3つあることや210日を一年とするウク暦のために、既婚夫婦の共同作業の負担は大きい。労力だけでなく、寺院の補修や改修、祭礼や儀礼のたびに徴収される寄付金も、1回は少額でも回数が多いだけに負担である。未婚者は、夫婦一組で遂行する義務を担うことができないので、年齢や性別にかかわらず、正式のメンバーになれない。未婚者は、両親が健在であれば両親の夫婦家族の一員とみなされる。両親がリタイアすると、兄弟夫婦家族の一員になる。兄弟がリタイアしたときは、兄弟の息子（甥）夫婦家族の一員になる。

リタイアの時期は、地域や慣習部落によって異なる。引退の年齢が定められている地域もあれば、末子が結婚した時点とする地域、配偶者の一方が死亡して寡婦・寡

夫となり、夫婦一組の義務が果たせなくなった時点とする地域もある。グヌンサリ慣習村の2つの慣習部落では、息子の一人が結婚した時点で、両親ともに健在でも引退し、未婚の子弟とともに息子夫婦家族の一員とみなされる。最初に結婚するのは長男が多いが、年序にかかわらず最初に結婚した息子夫婦家族の一員となり、息子は結婚した順に全員慣習部落のメンバーになる。

6-2 活動的メンバーと非活動的メンバー

近年は、進学や就職で離村し、村外で結婚する出身者も多い。しかし、居住地がバリ島内である限り、大きな儀礼や祭礼の際は頻繁に帰省する。結婚して就労先の町に持ち家を購入し、町の慣習部落で行政上の住民登録する場合はであっても、出身地の慣習部落や慣習村のメンバーであり続けるバリ人が大半である。このため、グヌンサリ慣習村では、構成員を①活動的メンバー（Pengayah Tetap）と②非活動的メンバー（Karyawan〔会社員〕）の2種に区別している。

①活動的メンバーは、固定して変わらずに「ンガヤngayahn」する人を意味する。ンガヤとは、神々や祖霊や自然など上位者への奉仕活動を意味するバリ語である。つまり、日常のかつ積極的にンガヤできる村内居住のメンバーを指す。具体的には寺院の祭礼や儀礼の準備や施行のための共同作業に参加することである。このため、インドネシア語のゴトンロヨン（相互扶助）と言い換えられることもある。だが、ゴトンロヨンとンガヤはニュアンスが違う。②非活動的メンバーは、会社員と表記される。村内在住でも会社員や公務員は自由に活動に参加できないので、この名で非活動的メンバーを表すようになった。今は、町や都市で働く村外メンバーを指す言葉として使われている。名簿では、村外に居住する出身者だけでなく、免除職に就く役職者もこのカテゴリーに分類されて記載されていた。

②非活動的メンバーとして、②-1 村外在住の出身者だけでなく、②-2 免除職に就く役職者も一緒に分類されていたのは、共同作業の出欠を確認するための名簿だからである。免除職として、寺院祭司（ジェロマンク）、慣習村三役、連絡係、治安維持団員（慣習・行政の兼任）、寡婦・寡夫、婦人会役員 PKK（行政）、村議会 BPD 議員（行政）が記載されていた。②-1 は、共同作業に日常的に参加できないが、頻繁に帰省して、勤め先の居住地と地元の慣習部落を行き来する。共同作業に参加できない代わりに寄付金（ペナルティ料金）を支払うことでメンバーシップを保持し続ける。②-2 は、免

除職なので、②-1 村外メンバーのように寄付金を支払うことはない。ここでは、免除職として、慣習（アダット）次元の役職だけでなく、部落単位で選出される村協議会や婦人会のような行政（ディナス）次元の役職者が含まれていることに留意したい。今日の部落（バンジャール）では、慣習次元の活動と行政次元の活動が厳密に区別されているわけではない。

免除職以外の非活動的メンバーが支払う寄付金（決められた額）をペナルティ料金と呼ぶことを躊躇する役職者もいる。①活動的メンバーであれ、②非活動的メンバーであれ、同じメンバーとして一緒に活動することが大事とされる。①活動的メンバーは、共同作業（ゴトンロヨン）を日常的に担う積極的に活動できるメンバーである。②非活動的メンバーは、共同作業に参加できないときは1日5千ルピア支払い、ガルンガンの時は寄付金25万ルピア支払う。起源の寺院は、210日を1年とする周年祭（オダラン）を行う。3回に1回のサイクルで大きな周年祭がまわってくる。太陽暦にすると1.5年サイクルでまわってくる大きな周年祭や火葬儀礼の時は、村外メンバーも帰省する。このとき寄付金や不足金をまとめて支払う。息子夫婦が村外に居住し両親が村内に残っている場合は、親夫婦が息子夫婦に代わって①活動的メンバーとして共同作業する。高齢で作業を負担と感じれば②非活動的メンバーを選ぶことができる。

6-3 事例1：活動的メンバー

事例1は、グヌンサリ・デサ部落の屋敷地（19）（図1）に居住する活動的メンバーである（2017年8月のインタビュー）。

◇家族：本人（1971年生、高卒、農業と大工〔彫刻の兼業〕）、妻（1974年生、シンガラジャ出身）、子供3人（長女1994年生、次女2000年生〔2017年没〕、三女2005年生）の5人家族。

◇屋敷地：この屋敷地（19）は、屋敷地（4）を出自とするダディア・タンカスのメンバー。屋敷地（13アール）には家屋が14と集会所が2つあり、父方親族が居住している。本人家族は2つの家屋を所有する。ひとつの家屋は本人家族が居住する。もうひとつの家屋は、未婚の長姉が日常的に起居し、バンリとギアニャールに住む長兄と次兄2人の夫婦家族が儀礼や祭礼で帰省したときに泊まる。

◇両親とキョウダイ：父は2001年死亡。母は2008年死亡。両親には子供が6人いる。本人は兄弟姉妹6人キョウダイの6番目の末子（男3人の三男）。第1子（1952

年生の長女＝本人の長姉）は未婚で、同じ屋敷地のもうひとつの家屋に住み、農業手伝いをしている。第2子（1960年生の次女＝本人の次姉）は、ジャティルイ慣習村の男性と結婚して農業している。第3子（1961年生の長男＝本人の長兄）は、結婚してバンリの農業局に勤める公務員。第4子（1965年生の次男＝本人の次兄）はギアニャールに住む大工。第5子（1968年生の三女＝本人に近い末姉）は、未婚でデンパサール市に住んで仕立てをしている。

◇行政部落と慣習部落：行政部落（ジャティルイ行政村）に登録している世帯は、本人夫婦と娘2人と未婚の長姉1人の1夫婦家族（KK）5人である。慣習部落（慣習村）のメンバーは、長兄夫婦家族と次兄夫婦家族と本人夫婦家族の3家族（KK）である。

◇生活史：本人は、高校卒業後に、ギアニャールで彫刻家の修業をしながら働いた。シンガラジャのルピナ・ビーチで観光業の会社に勤めてガイドをしたこともある。2人の兄が村外のバンリ県とギアニャール県にそれぞれ持ち家を建てたので、1994年の本人の結婚をきっかけに地元に戻り、農業するようになった。本人は子供のころから親と一緒に農業をしていた。妻はシンガラジャ出身。ギアニャールで出稼ぎしていたときに本人と出会い結婚。妻の実家は非農家。

この事例のように、グヌンサリ慣習村では、息子（子供）のなかの誰か一人は、地元に戻ることが多い。この事例では、2人の兄が、先に結婚して、村外で安定した生活基盤を築いていたので、3人の男子のなかの末男子が、結婚をきっかけに地元に戻っている。帰村の理由について、本人の妻は、「夫が地元に戻ったのは、兄弟のなかでだれもアダットの活動する人がいないのは問題と考えたから。大きなダディアがあり、夫は積極的に参加している」と語る。帰村の第一の理由が、親と同居するためでも、農業を継ぐためでもなく、「アダットの活動」のためと考えられていることにバリ・ヒンドゥー村落の特徴を見いだせよう。「アダット（慣習）の活動」には、慣習村の寺院の祭礼や部落の通過儀礼に活動的メンバーとして積極的に参加するだけでなく、出自に関わるダディアや屋敷寺院の活動も含まれている。兄2人が地元を離れて村外で生活している以上、地元に戻り、日常的にアダットの活動に関わるのは末の弟しかいない。それゆえ、末男子である本人が、屋敷地に戻り、両親や未婚の姉の近くに生きて、農業している。そのきっかけが、結婚であることにも目を向けたい。両親に代わって、慣習村や部落のアダットの活動をするには、結婚し

て、夫婦一組で、慣習村と部落と正式なメンバーになる必要がある。水利組合（スバック）の正式なメンバーの条件も、スバック寺院の祭礼や農事関連の儀礼とのかかわりで、既婚男子と既婚女子が夫婦一組で役割を遂行することが必要である。アダットの活動が何よりも重視されており、老親との同居や農業の継承は、それに付随している。

シンガラジャの非農家出身の妻は、「農業はゼロからのスタートで、義母が丁寧に教えてくれた」。「儀式の準備も勉強中。同じヒンドゥーでも、シンガラジャとこちらでは全然違う」。妻の語りからは、農業だけでなく、女性の役割である儀礼のための供物の準備も、村外出身の妻が、時間をかけて見習い覚えようとしている様子がかがえる。義母（夫の母）は、義父のハトコで、畑の仕事のために山林の宅地（ポンドック）で育ったとのことである。部落内やダディア内の結婚が多いひとつの理由は、供物の準備に代表される儀礼や祭礼の準備が、地域によって多様で、煩雑であることと無関係ではあるまい。子供のころに母の手伝いをしながら見習い覚える供物の準備を、村外出身の妻は、結婚後に義母から時間をかけて習うことになる。村外出身の女性が増えてきた今日、既婚女性の役割である儀礼の準備や供物づくりについて質問すると、結婚して20年近く経っていても、「妻はまだ勉強中で今は母が担当している」という回答がかえってくる。

6-4 事例2：引退したメンバー

グヌンサリ・ウマカユ部落の屋敷地①（図1）に居住する家族の事例である¹⁰（2017年8月のインタビュー）。◇家族：本人（1962年生、ジャティルイ第2小学校の教員）と妻（1965年生タバナン県タバナン郡ブブ村出身）子供は男子2人で、長男（1985年生）と次男（1996年生）である。長男は、2004年に南スマトラ在住の父方のハトコ（本人の父の長兄の息子の娘）と結婚して、南スマトラのハトコの実家で農業している。次男は、2016年に学生結婚し、デンパサールに住んでいる。次男の妻はタバナン県プヌブル郡ワンガヤ村出身。

次男の結婚にともない次男夫婦がアダットの正式なメンバーとなり、本人夫婦は引退している。だが、次男夫婦は学生でデンパサール市に住んでいるため、日常的なアダットの活動は、次男に代わって本人が、次男の妻に代わって本人の妻がそのまま遂行している。女性の作業のときは、次男の妻の名前で本人の妻が出席の記帳をする。進学や就職で離村が増えた今日、親が健在であれ

ば、子ども夫婦に代わって親夫婦がメンバーとしての義務を代行する。それゆえ、子ども夫婦が、地元に戻りアダットの活動に日常的に参加しなくても非活動的メンバーとしての寄付金を取る必要はない。

長男は、結婚してスマトラの慣習村と部落のメンバーになっているので、グヌンサリ・ウマカユ部落の正式なメンバーではない。なお、スマトラやスラウェシやジャワなど島外に定住するようになると、遺体をバリ島まで運んで葬送儀礼ができるわけではない。このため、バリ・ヒンドゥーは移住先にヒンドゥー寺院を建立し、部落（バンジャール）に似たコミュニティを形成して、葬送儀礼を実施する¹¹。移住先の部落のメンバーになると出身地の部落と慣習村を退会する。だが、出身地の屋敷寺院の大きな儀式のときは帰省する。

長男の結婚相手の父は、本人のイトコ（父の兄弟〔長男〕の息子）である。子どもは娘2人で息子がいないため、儀式でバリの屋敷地に帰った際に婿を探していた。長男を気に入り、スマトラに来ないかと誘った。最初長男は乗り気でなかった。だが、スマトラに遊びに行くうちに、広大な畑とりっぱな家屋が気に入り、イトコの娘と結婚した。長男は婿にいったのか、嫁をもらったのかという質問に、どちらともいえないと回答された。妻方の屋敷地に居住し、妻方の部落のメンバーになったという意味では、婿と同じである。だが、長男にとっても長男の妻にとっても、グヌンサリ・ウマカユ慣習部落の出自の屋敷寺院とのかかわりがなくなるわけではない。移住先で葬送儀礼をおこなっても、儀礼の最終段階は、出自の屋敷寺院でおこなう。その意味では、屋敷寺院のある屋敷地が長男夫婦の出自であり続ける。

なお、息子の結婚にともなう親夫婦の引退と正式なメンバーの資格の交代については、父から息子に慣習村長の役職を継承した事例もある。グヌンサリ・ウマカユ部落の山林の宅地に住む住民（1952年生）は、1977年に25歳で結婚した。当時、グヌンサリ慣習村長だった父は、息子の結婚によって引退し、父に代わり息子が2年間慣習村長を務めた。今日ではこのようなケースは考えにくいだが、当時は勉強させてもらうつもりで就任したと語る（2015年8月のインタビュー）。

6-5 事例3：村外メンバー

今日では、村外に生活拠点をおくメンバーが増えて、屋敷地の家屋に日常的起居するのは、農業や大工、役場職員や学校教員を職業とする住民だけである。それ以外は、高齢者だけの世帯や空家屋も増えた。だが、親が

出身の部落の屋敷地にいない場合でも、バリ人は、祭礼や儀礼のたびに頻繁に帰省する。

事例3は、屋敷地①(図1)に家屋をもつ家族である。この家屋は、林業局の公務員の所有である。本人は死亡したが、子供が5人(女子3人と男子2人)おり、第4子の長男(1976年生、ボゴール農科大学卒)は、タバナン県の農業局に勤務する公務員である。結婚して母と妻と子供2人と一緒にタバナン県クディリ郡に住んでいる。第5子の次男(1978年生)はグラライ空港勤務で、結婚して妻と子供2人と一緒にデンパサールに住んでいる。

長男も次男も、勤務地の町に持ち家があり、持ち家のある居住地で行政上の住民登録をしている。親が屋敷地にいるわけではないので、平日はこの家屋には誰もいない。だが、どちらも慣習村と部落のメンバーであり、儀礼の際には帰省するし、週末は兄弟のどちらかが屋敷地の家屋にいる(2013年9月時点)。

グヌンサリ慣習村の屋敷地の中には、長く人が住まないことで空き家に近い状態の家屋もみられる。事例3は、タバナン県とデンパサール市というジャティルイ村からアクセスしやすい島内に住んでいるため頻繁な帰省ができる。

7. 慣習部落と葬送儀礼(埋葬儀礼と火葬儀礼)

7-1 葬送儀礼の相互扶助組織

地元を離れても部落(バンジャール)のメンバーを続けるのは、バリ・ヒンドゥーの通過儀礼のためである。バリ・ヒンドゥーの人生でもっとも重要な通過儀礼は、葬送儀礼、とりわけ火葬儀礼である¹²⁾。火葬儀礼は、埋葬儀礼より儀礼の期間も長く、盛大である。それだけに、準備のための労力や経済的負担が大きい。葬送儀礼を遂行し、費用の経済的負担をする義務があるのは息子(子供)たちである。財産相続と同様に男子は、親の葬送儀礼の金銭的負担を均等にもつ。埋葬儀礼は、死亡後すぐにおこなうが、火葬儀礼は埋葬儀礼から数年後におこなうことが多い。この間、息子たちは火葬儀礼の費用を調達する。

埋葬儀礼と火葬儀礼を同時におこなうのは、慣習村の3つの寺院の寺院祭司の儀礼である。寺院祭司の葬送儀礼は、慣習村が主催し、慣習村が費用を負担する。一般の住民は、死者の家族が主催者で、慣習村の共同の埋葬地にいったん埋葬し、埋葬儀礼から数年を経て火葬儀礼をおこなう。富裕層は、火葬儀礼の費用の調達に苦勞し

ないので、葬送儀礼と火葬儀礼を同時におこなう。富裕であるほど、埋葬儀礼から火葬儀礼の期間は短くなり、逆に貧困層は長くなる。父親が病気がちで水田を売却するほど困窮していたグヌンサリ・デサ部落のダディア・マヌカンの家族は、当時の貧困の例として、祖母の火葬儀礼を15年間だせなかったことをあげている。貧困層は、寺院祭司やダディアのメンバーの火葬儀礼と一緒に合同火葬儀礼をおこない、ブラフマナ祭司に支払う費用や供物の費用を軽減する。

葬送儀礼のなかでも火葬儀礼は特に盛大なので、儀礼の遂行に必要な労力は親族の協力だけでは足りない。バンジャールは、埋葬儀礼や火葬儀礼の準備を共同ないしは輪番でおこない、葬送儀礼のための労力を提供する。部落(バンジャール)は葬送儀礼の相互扶助組織である。

7-2 グヌンサリ・デサ部落の葬式組

まず、グヌンサリ・デサ部落の慣習部落長(バンジャール・アダット長)[1962年生、養鶏場勤務の農民]を対象に2009年9月と2014年8月におこなった葬送儀礼と葬式組についての半構造化インタビューの結果をまとめる。

慣習部落長(バンジャール・アダット長)に就任したのは2009年3月。任期は3年。前任者の任期が終わったので本人が推薦された。アダット長に就任して6ヵ月(2009年9月末時点)で10人亡くなった。うち直接火葬儀礼をおこなったのは1人である。

埋葬儀礼は早くても1日、長くても3日ですむ。火葬儀礼は1週間ほどかかる。かつては埋葬儀礼の後に7年間かけて費用を準備し、火葬儀礼をやっていた。準備期間も1ヵ月ほどかけていた。寺院祭司以外に直接火葬儀礼をおこなう人は少なく、経済力があることのシンボルである。最近では、出稼ぎが増えたので2つの儀礼を1回1週間でまとめてすませるほうが楽という考えから、ローンを借りて直接火葬儀礼をやる人が増え、埋葬儀礼から火葬儀礼までの期間が短くなった。とはいえ、今でも直接火葬儀礼をやる人より、埋葬儀礼の1年後に火葬儀礼をやる人が多い。寺院祭司(ジェロマンク)は必ず埋葬儀礼と火葬儀礼を同時におこなうと決められている。葬送儀礼の費用も責任も、家族や部落ではなく、慣習村が負う。

火葬儀礼は供物やおもてなしの費用として5,000万ルピア(日本円で50万円程度)かかる。供物の数が違うので、供物の費用だけでも、埋葬儀礼は200万ルピア、火

葬儀礼は3,000万ルピア必要である。部落の会費は葬送儀礼のための寄付金だけである。埋葬儀礼も火葬儀礼も、①活動的メンバーは5,000ルピア②非活動的メンバーは1万ルピアと寄付金の額を区別しており、非活動的メンバーの寄付金は活動的メンバーの2倍である。寄付金を3回連続して払わない時は、部落で埋葬儀礼や火葬儀礼の手伝いをしないという慣習法もある。今までそういう例はない。遠方に居住して働いている人は寄付金を支払うだけだが、タパナン県内やデンパサール市であれば3日間程度は帰村し、準備作業や儀礼に参加する。

埋葬儀礼のための部落の共同作業は、墓堀、お棺づくり、遺体を清める準備、埋葬後の片づけなどである。家族は家屋から埋葬場までお棺を運び、来訪者を接待する。火葬儀礼のための共同作業は、火葬用の箱や供物を提供し、埋葬場から遺体を家屋に連れてくる。直接火葬儀礼をする時は遺体を燃やすが、埋葬儀礼（土葬）から時間を経て火葬儀礼をする時は、埋葬された場所の土をとってきてシンボルとして紙の人形を燃やす。以前は土葬された遺体を掘り出していたが、衛生面から問題があると県に指導されて変わった。

グヌンサリ・デサ部落は、19の屋敷地を地理的位置に応じて4つの組（ルグ Regu）に分けている（表3）。山林の畑の新宅地（ポンドック）も、出自の集落の屋敷地と同じ組である。1組（北東）は屋敷地（1）から（5）、2組（南東）は屋敷地（11）から（14）、3組（北西）は屋敷地（6）から（10）、4組（南西）は屋敷地（15）から（19）の出自のメンバーである（図1）。

各組には、組長（Ketua Regu 連絡係）と秘書と会計がいる。慣習部落の総会はないが、必要に応じて各ルグの3役（ルグ長・秘書・会計3人×4組＝計12名）と慣習部落の3役（アダット長と秘書（情報の記録係）と会計の3名）の計15名が臨時で集まって相談する。組長（ルグ長）は各組の話し合いで決める。輪番だが、年齢や屋敷地ごとに順番が決まっているわけではない。一度もルグ長を経験していない人が名前をあげられると断れない。ルグ長の仕事はあらゆる情報をルグのメンバーに伝達すること。寄付金があるときは、ルグの会計が集金してアダットの会計にもっていく。

各組のなかに15人のグループ（クロンボック Kelompok）が3グループ（メンバーは固定）程度ある。葬送儀礼をおこなう死者の家族を除く各組が交替で共同作業（ゴトンロヨン）をする。1週間儀礼があるときは、7グループが作業する。1日60人必要な時は4グループが作業する。共同作業する人の食事代や儀礼に必要な費用

表3 グヌンサリ・デサ部落の葬式組（ルグ）

1組（北東）	屋敷地5＋新宅地5
2組（南東）	屋敷地4
3組（北西）	屋敷地5＋新宅地1
4組（南西）	屋敷地5＋新宅地1

は、死者の家族が負担する。料理は各グループが当番で準備する。

埋葬儀礼も火葬儀礼も死者の所属する組（ルグ）が準備する。死者の家族は作業を免除される。また、死者の親族は、当番の組でなくともより積極的に作業を手伝う。この慣習部落は、マヌカンとタンカスという2つの親族集団（ダディア）がある。ダディア単位で火葬儀礼をやるのはマヌカンだけである。

7-3 寺院祭司（ジェロマンク）の合同火葬儀礼

（2016年8月22日 新慣習村長（グヌンサリ・デサ部落、1971年生）と慣習村の会計（グヌンサリ・デサ部落、1970年生）を対象とするインタビューによる）

次に、グヌンサリ・デサ部落で2016年6月に実施された合同火葬儀礼を概観する。この時は、冥界寺院の寺院祭司の逝去に際して、慣習村が主催して埋葬儀礼と火葬儀礼が同時に遂行された。葬送儀礼の費用は、2つの慣習部落のメンバーの寄付金である。この時の寄付金は、計4000万ルピア集金された。合同火葬儀礼に参加する家族を募ったところ、埋葬儀礼後にまだ火葬儀礼をしていない5家族が参加を希望した。各家族1000万ルピアの費用を負担し、寄付金4000万ルピアと各1000万ルピア×5で9000万ルピアの盛大な火葬儀礼がおこなわれた。なお、単独で火葬儀礼をしようとする規模にもよるが平均5000万ルピアかかる。慣習村主催の合同火葬儀礼が、火葬儀礼を単独の家族で遂行することが難しい貧困層の扶助になっていることが分かる。

この時の合同火葬儀礼は準備作業9日間を含めて10日間かかった。①9日前から4日間、1日2グループが交替での共同作業（ゴトンロヨン）、②4日前になると全員参加の共同作業になり、5日間交替で用意された食事をする。女性は供物の準備と食事づくりを担当し、男性は埋葬場の清掃をする。③3日前は5人の火葬の準備をした。遺体を掘り起こし、シンボルとしての土を持ってくる。④2日前は作業なしの休憩。⑤1日前は遺体のシンボルを清める⑥火葬儀礼の本番当日は火葬と安置である。

この時の合同火葬儀礼は、慣習村が共有する冥界寺院の寺院祭司の火葬儀礼なので、慣習村が経済的費用を負担している。だが、実際の共同作業は各部落のグループでおこなう。また、合同火葬儀礼に参加した5家族は、すべてグヌンサリ・デサ部落のメンバーである。このことは冥界寺院の寺院祭司が、グヌンサリ・デサ部落の屋敷地のメンバーであることと関わっている。

なお近年バリ島では、このような慣習村が主催する寺院祭司の合同火葬儀礼や部落内の親族集団（ダディア）が主催する合同火葬儀礼とは違う、数年に1回、その間に亡くなった人の火葬儀礼を、部落主催でまとめておこなう集団火葬儀礼が見られるようになった。このような部落で一斉に火葬儀礼を実施する集団火葬儀礼を共同火葬儀礼と呼び、部落の伝統的な共同性の復活であるかのように見なす見解がある。だが、このような部落主催の集団火葬儀礼は、都市で働く出身者が農村に頻繁に帰省することが難しくなった状況を背景に、帰省の回数を減らすために部落で創案された新しいかたちの火葬儀礼である（鏡味 2005、中谷 2012: 102-106）。このような火葬儀礼の集団化は、遺族（家族）が主催し、慣習部落の葬式組（ルグ）が輪番で葬送儀礼の作業を手伝う従来の方式から見ると大きな転換である。

グヌンサリ慣習村の2つの慣習部落では、個々の家族が主催する以外は、屋敷地単位がダディア単位である。グヌンサリ・デサ部落のアダット長によると、今は屋敷地単位でやるよりも個々の家族でやる人のほうが多いということである。個人や家族で考え方が異なり、盛大にやりたい人もいれば、普通にやりたい人もいる。相談するブラフマナ祭司（プダング）が違うので吉日についての考え方も違う。火葬儀礼を個人でやるか、屋敷地でまとめてやるかに部落が関与することはない。火葬儀礼が一番重要で一番労力が必要な儀礼であるが、家族が費用を負担して、部落は労力を提供する。削歯儀礼（成人儀礼）や生後3か月の儀礼や結婚儀礼や屋敷寺院の改装儀礼など、すべての儀礼はアダットの活動とみなされる。だが、今日、部落が作業の人手をだすのは葬送儀礼だけと語る。そうはいつても、個々の家族が自由に葬送儀礼の日程を決められるわけではない。儀礼の日程については、慣習村の儀礼と重ねてはいけないうし、埋葬場はグヌンサリ・ウマカユ慣習部落と共同である。家族がブラフマナ祭司に相談して吉日を決めてもらい、アダット長に相談する。アダット長から慣習村長に届ける。実施日が決まると各葬式組（ルグ）に連絡がいくという手順で進められる。

8. 慣習村内の集団①慣習的治安維持団（プチャラン）

8-1 グヌンサリ慣習村の慣習的治安維持団

慣習村内にある重要な集団としてプチャラン（Pecalang）といわれる慣習次元の治安維持団がある。ここでは、プチャランを慣習的治安維持団と訳する。プチャランとは、「凝視し見守る者、監視する者」を意味するバリ語で、一般には、宗教的祭礼時のみ交通の整理や人の誘導をおこなう。菱山（2017: 47-51）は、アジアの通貨危機後の島外からの移住者の増加や爆弾テロ後の治安の悪化を背景に、スハルト体制期には宗教的祭礼時の役割に限定されて規模や人員も縮小されていたプチャランが、軍や警察との協力も視野に入れながら不審なよそ者（島外からの移住者）の取り締まりやインフォーマル・セクターの排除を始めた状況を指摘する。筆者も宅地化が進む州都デンパサール市の近郊農村プモガン村を調査した際に、アジアの通貨危機後の島外からの移住者の増加や爆弾テロ後の治安の悪化を背景に、島外からのムスリムの一時滞在者の身分証をプチャランがチェックし、身分証をもたない貧困な移住者から罰金を徴収して慣習村や部落の収入にするケースを確認している（永野 2008, 2009）。

グヌンサリ慣習村は、幹線道路からは離れた農業中心の棚田村なので、島外からきた一時滞在のムスリムの移住者は皆無で、州都周辺のような島外の移住者の取り締まりや排斥はおこなわれていない。以下、プチャラン長（1969年生、グヌンサリ・デサ部落、ダディア・タンカス）のインタビューを中心に、グヌンサリ慣習村でのプチャランの役割をみていく（2016年8月時点）。

プチャラン長は慣習村の正規のメンバーである既婚男子のなかから慣習村長の指名で選出される。結婚していないとアダットと結ばれていないので、既婚男子に限られると語る。本人は、グヌンサリ慣習村の出身ではなく、ジャティルイ慣習村の東ジャティルイ部落の出身。1984年高卒後、地元に戻って農業（水田）をしていた。1991年に結婚して、グヌンサリ・デサ部落の山林の新宅地（ボンドック）の婿になり、黒砂糖加工を習得した。今は、農業（水田）と大工のアシスタントもしている。1994年にプチャランに就任する。2016年8月まで慣習村長は4人交代（1人目グヌンサリ・ウマカユ部落、2人目グヌンサリ・デサ部落、3人目グヌンサリ・ウマカユ部落、4人目グヌンサリ・デサ部落）したが、この間20年間プチャランを続けている。2人目の慣習村長の指名

でプチャラン長に就任する。以来、慣習村長は2人交代し、何回もやめたいと申し出たが、代わりの人がいないと頼まれて留任している。

プチャランは慣習村の3つの行政部落から各5人計15人いる。2010年以前は、慣習次元でも行政次元でも部落は2つだったので、各5人×2部落で計10名だった。グヌンサリ・ウマカユ部落が2つの行政部落に分かれた2010年以降は、各5人×3部落で計15名になった。「活動的メンバーでないとプチャランの仕事はできないし、ンガヤ（奉仕）の精神をもたないと成れない」と語る。このため15人のうち11人は農民で、兼業で大工、農産物仲買、養鶏をしている。他に、村内のレストラン警備員、警察官（プヌブル郡）、軍人（プヌブル郡）、村役場職員が各1人である。全員30代40代の既婚男子で、最年少は30代前半、最年長はプチャラン長本人で当時47才である。

一番重要なプチャランの仕事は、3つの寺院の周年祭（オダラン）の時の交通整理である。人が多いし、交通も混乱する。境内に入る人数を制限したり、並ばせて順番にお祈りをさせたりする。人の出入りを調整し、混雑しないようにする。お布施を集めて箱に入れて、周年祭の翌日に金額を確認して慣習村の会計に渡す。火葬儀礼の時は交通整理が主で他の仕事はない。埋葬儀礼は交通整理がいらないので、慣習部落の一員として共同作業に参加する。亡くなった人と同じ葬式組の時は、当番制の共同作業で穴を掘り、埋葬する。安置は簡単なので家族・親族だけでやる。誕生祝や削歯儀礼（成人式）や結婚式といった通過儀礼の際はプチャランの仕事はない。リクエストがあったら仕事をするが、お金ではなく料理（ごはんとおかず）をもってきてもらう。静寂の日（ニュピ）は巡視と治安の管理をする。巡視は自分の部落を担当し、プチャラン長に報告がくる。午前と昼は2-3人で交替し、夜は5人全員でまわる。平和で違反者はほとんどいない。門を閉ざし、家のなかで静かにしている。服装チェックやかけ事など、プチャランの取り締まりが必要なことは、この村にはない。

プチャランの役割は、バリ・ヒンドゥーの祭礼時の交通整理や人の誘導にとどまらない。行方不明者の捜索や救出、有事の際の避難の誘導や救出もありうる。登山や畑に行き行って戻ってこない住民の捜索や救出の仕事もある。人の命にかかわることなので時刻と関わりなく見つけるまで捜索する。先月の深夜11時過ぎに電話があり、家出した人の家族が心配していたので捜索したこともある。その時は川の傍に座っている40代男性をプチャラン

が見つけた。ゴトンロヨンの精神とは違うンガヤ（Ngayha）の精神がないとできない。

8-2 ジャティルイ行政村の行政的治安維持団

グヌンサリ慣習村では、慣習的治安維持団（プチャラン）と行政的治安維持団（ハンシップ）のメンバーが同一である。ハンシップ（HANSHIP）とは、スハルト体制期の1982年に中央集権機構の末端に設置された行政（ディナス）次元の治安維持団である。

ジャティルイ村の行政的治安維持団（ハンシップ）の活動内容は、選挙（大統領選、州知事選、県知事選、行政村長選、国会議員や地方議員の選挙）の管理（会場準備、警備、二重投票のチェック、投票数のチェック、投票箱の搬送など）および州知事や県知事訪問時の警備である。

慣習的治安維持団（プチャラン）の役割を遂行するときは、白黒市松模様の腰布をまとい短剣を腰に差した伝統的な装束を身に着ける。行政的治安維持団（ハンシップ）の役割を遂行するときは、行政村長から支給された制服を着る。ハンシップの仕事は、プチャランと違い日当が支給される。大統領選は4日間で45万ルピアなので、仕事は大変だが収入は良い。ハンシップとしての仕事は行政村なので、2つの慣習村が関わっており、隣のジャティルイ慣習村のプチャラン長との打ち合わせも必要である。ハンシップとプチャランを兼ねているのは、本人の知る限り普通のことである。

8-3 ンガヤの精神と世界遺産登録に伴う変化

慣習的治安維持団の活動を、ゴトンロヨンというインドネシア語と区別して、ンガヤというバリ語で説明していることが印象的だった。ンガヤは、神々や祖霊や自然といった上位の相手に対する無償の奉仕活動を意味する。相互扶助や共同作業と訳されることが多いゴトンロヨンに対して、バリ・ヒンドゥーのアダット次元の活動の精神が語られる。

だが、世界遺産に登録されて、観光客が激増するなかで、プチャランの仕事も急速に変質している。プチャランが伝統的な装束を着てトレッキング・コースの入り口で入場料を徴収したり、駐車場の交通整理をしたりして日当を得るようになった。また、観光客が迷子や行方不明になった時の捜索などの仕事加わり、人数が必要な時は2つの慣習村のプチャラン各5人×8部落＝計40(35)人で捜索する時もある。

このように、近年のジャティルイ村にある2つの慣習

村のプチャランの仕事は祭礼時の交通整理やニュピの見回りとどまらず、行政村の治安やガードマンの仕事に加え、観光収入の管理や観光客に関連する仕事加わるなど、大きく変容している。これによって、慣習村の免除職（名誉職）としての無償の奉仕活動に、謝金や日当を支払われるハンシップの仕事と観光関連の有償の仕事が重ねられるようになった。

9. 慣習村内の組織②婦人会

1) 行政村内の婦人会（PKK）

ジャティルイ行政村にも、スハルト体制期にインドネシア国家の末端の行政村におかれた日本の婦人会にあたるPKK（ペーカーカー：家族福祉エンパワーメント）が設置されている（斎藤：2009）。ポスト・スハルト期にあって、PKKは、スハルト期と同様にインドネシア政府の行政機構における州・県・郡・村の各次元で州知事・県知事・郡長；村長の夫人が会長になって活動を展開している。

以下は、2009年6月時点のジャティルイ行政村長（1968年生、当時41才）の妻でPKK長（1968年生、当時41才、大卒）およびグヌンサリ・デサ部落のPKKのメンバー（1978年生、31才）のヒアリングによる。

PKK長はジャティルイのプスケスマス（保健所 Puskesmas）に勤務する村で唯一の助産師である。1988年に看護学校を卒業し、助産師としてデンパサール市の病院に2年間勤務した後、ジャティルイ村のプスケスマスで働いていた。1994年に結婚し、翌1995年から自宅のある屋敷地内の診療所で妊婦の出産を介助している。夫が2002年に行政村長に当選したのでPKK長になり、5年任期で2期目の途中である。PKK（婦人会）のメンバーは、PKK長の指名で就任する。リーダーを含めて各部落5人のメンバーがおり、部落7つで計35人（2010年から40人）がメンバーである。

グヌンサリ・デサ部落のPKKは、リーダーも含めて5人全員が同年代の同級生か、その友人。全員30代で40代はいない。本人は、夫（1978年、31才、養鶏場勤務）と同じグヌンサリ・デサ村の別の屋敷地の出身。夫（養鶏場勤務）とは小学校から高校までのクラスメイト。子供は2人で長男（8才）と長女（1歳未満）。長女が生まれるまで夫と同じ養鶏所に勤めていたが、長女出産時にやめて、農業と養豚と家事。PKKの活動は、1）アリスン（頼母子講）と2）母子保健グループ（ポスヤンドゥ Posyandu）の活動と3）体操である。アリスンは、毎月14日に寄付金各2万5千ルピアを40人が持ち寄

り、1回2人当選する。当選者は1人50万ルピアもらえ、何に使うかは自由で台所用品や祭日の小遣銭にしている。ポスヤンドゥは、毎月17日の朝8時から10時までの活動で、5歳未満の乳幼児の予防接種や体重・身長測定をする。グヌンサリ慣習村の集会所で、2つの慣習部落のPKK10人のうち4人ずつ交代で当番し、大豆のおかゆとゆで卵を準備する。体操は、毎週日曜夕方40人のPKK全員が集まる。この3つの活動は、インドネシアの婦人会の活動として、バリ州に限らず一般的で、村落でも町でも変わらない。ジャティルイ村では、アダットの活動が盛んなので、PKKのようなディナスの活動は盛んではないとのことである。

2) 慣習村内の既婚女性の活動

慣習村内のアダット次元の女性の集まりについて慣習村長に尋ねると、既婚女性のアダットの活動に固有の名称がないので、この村ではアダットの活動も含めて官製団体である婦人会の名前を借りてPKKと呼んでいるとのことである。既婚女性の役割は、祭礼でも葬送儀礼でも供物の準備である。起源の寺院と村の寺院の定期祭礼（オダラン）の準備の時に既婚女性は集まるが、夫婦が単位なので特に既婚女性だけの集会有るわけではないし、婦人会長がいるわけでもない。供物づくりを指導するのは、寺院祭司（ジェロマンク）のアシスタントなので、供物についての女性のリーダーがいるわけではない。一組の既婚夫婦を正規のメンバーとする慣習村と部落のなかに、既婚男性だけの組織がないと同様、既婚女性の組織があるわけではない。

10. 慣習村内の組織③青年団

未婚男女が属する組織も、①行政（デサ）次元の「青年団（Karang Taruna）」と②慣習次元の「青年団（スカ・トゥルナ・トゥルニ Seka Truna Truni）」がある。行政次元の青年団は、婦会と同様、スハルト体制期の行政機構の末端に据えられた官製組織で、インドネシア語である。慣習次元の青年組織は、未婚男子と未婚女子の集団（スカ）を表すバリ語である。

以下は、グヌンサリ・ウマカユ部落の青年団のメンバー（1988年生、23才、大卒、グヌンサリ慣習村内のジャティルイ第二小学校の非常勤講師）のヒアリングによるものである（2011年9月時点）。

慣習的青年組織のメンバーは、中学2年から結婚するまでの未婚男女である。未婚であれば30代でも40代でも参加できるが、女性は30代、男性は40代になると参加し

づらくなり、活動にでてこなくなる。既婚者は脱退する。(1)グヌンサリ慣習村の青年組織のメンバーは約150人で、女性より男性のほうが多い。女性は結婚するのが早いからとのことである。(2)グヌンサリ・ウマカウ部落の青年組織のメンバーは約40人で男性約25人に女性約15人である。役職は、会長(1985年生、男性、大卒、デンパサール在住、バイク販売会社勤務)、秘書(1989年生、男性、シンガラジャにある大学生)、会計(1989年生、女性、高卒)の三役である。任期は5年。役職者も含めて村外で働くメンバーが多いので、半分以上は村にいない。村にいるのは中学生と高校生と中卒か高卒で農業している若者。

主な活動は、i) 1ヵ月に1回(第1週の日曜)の道路の清掃である。男性は草刈りとゴミ運び。女性は箒での清掃とゴミ集めをする。ii) 火葬儀礼や埋葬儀礼、結婚儀礼や慣習村の寺院の定期祭礼(オダラン)はじめ各種の祭礼の準備の手伝いである。i)は出席をとり、3回連続で欠席の場合は1万ルピア払う。村外メンバーが多いので、ペナルティ料金を支払う人は毎回10名程度いる。観光業やサービス業で日曜に参加できないやむをえない理由がある人である。3回連続で無断欠席した場合、本人が儀礼をやろうとしても青年組織は一切参加しない。そういう人は今まで一人もいなかった。ii)は義務ではなく、気持ちの問題なので出席をとらない。男女どちらも婦人会の指示で準備作業を手伝う。未婚男性は供物を会場まで運び、入れ物を作る。未婚女性はお茶や飲料を配る。葬送儀礼の際は、未婚男子は葬式組の組長(連絡係)の指示、未婚女子は組長の妻の指示にしたがう。慣習村は大きいので、身近な儀礼は部落単位で行う。子供のころからお互いに見知っている間柄で部落のほうが身近で重要。

以下、グヌンサリ・デサ部落の青年組織の活動は、婦人会のメンバーの女性のヒアリングによる(2009年9月時点)。

グヌンサリ・デサ部落の青年組織(Seka Truna Truni(未婚男子・未婚女子)のメンバーは70人程度で、メンバーの結婚式の準備(お茶、お菓子、飾りつけ)や寺院の儀礼の準備を手伝う。それ以外に、ガルンガン(祖霊が地上に帰ってくるバリ・ヒンドゥー最大の祭礼日)の時は、慣習部落の集会所でバザールをしている。青年組織は、未婚男女の恋愛や交際の場所になっている。実際、慣習部落内の結婚のきっかけとして、青年組織での活動はよく耳にする。

おわりに

タバナン県ジャティルイ行政村にあるグヌンサリ慣習村の2つの部落(バンジャール)を事例に、ポスト・スハルト期のバリ・ヒンドゥーの近隣集団の特質について考察してきた。スハルト体制崩壊後の分権化のなかで、バリ・ヒンドゥー村落の多元的集団構成は大きく変容していた。今日では、行政次元の村の組織や活動に慣習的要素が組み込まれ、慣習次元の村や部落の活動に行政的要素が組み込まれていた。

さらに、生活の基盤が現金収入になり、村外メンバーが増えたことで、バリ・ヒンドゥーの村の生活は大きく変容している。世界遺産の登録が村や住民にもたらす観光収入の増大は、こうした傾向に拍車をかける。しかし、儀礼や祭礼がバリ・ヒンドゥーの村落生活の中心であることは変わらない。儀礼や祭礼のための現金の支出がより大きくなり、それをまかなうための現金収入の必要性が、いっそう深く生活のすみずみまで浸透している。本稿の考察からは、こうした変化と同時に、今日でもなお部落(バンジャール)が、親族関係が重層する凝集力の強いバリ・ヒンドゥー固有の近隣集団であることが明らかにされた。バリ・ヒンドゥーの慣習部落は、ダディア(屋敷地連合)や屋敷地共住集団という父系的な親族集団と、部落内の婚姻とが多いため、父方・母方双方の親族結合が重層している。これらを包摂しつつも、部落は、葬送儀礼を中心に、通過儀礼と寺院の祭礼のためのバリ・ヒンドゥー固有の近隣居住の相互扶助組織として今日でも機能している。

注

- 1) 2001年に制定された州条例によって、慣習村の呼び名がデサ・アダットからデサ・パクラマンに変更された。それゆえ、ポスト・スハルト期の慣習村の呼称は、デサ・パクラマンである。だが、村(デサ)を行政(ディナス)と慣習(アダット)の二元性で捉えるため、本稿では慣習村をデサ・アダットと記述する。
- 2) スハルト体制期の観光地化の中で、バリの慣習村や水利組合や青年団や婦人会のコンテストが開催され、慣習法も審査対象になった。このため成文化された画一化された条文の文書が行政村で保管されている。慣習法は、本来、口頭で伝承されるものであり、状況変化に応じて合意形成のうえで変えられる弾力的な性格をもつ。
- 3) 慣習(アダット)と行政(ディナス)の二元性は、バリ・ヒンドゥーにだけ認められる特徴ではない。多民族国家インドネシアのなかで、ジャワ文化と異なる文化や宗教をもつ民族にあっては、慣習(アダット)が強調される。

- バリ・ヒンドゥーのアダットは、インドネシアにあつてはマイノリティであるが、インドネシア行政機構のなかでひとつの独立した州と位置づけられたバリ州＝バリ島内ではマジョリティである。
- 4) キャロル・ウォレンは、慣習村と部落の関係を、優劣や聖俗でとらえる通説を批判し、部落（バンジャール）は、慣習村の実際的な執行者であり、事実上は慣習村として動いているという意味で、慣習村の制度的表出であり、慣習村が顕現したものと述べている（Warren 1993：21-22）。
- 5) グヌンサリ慣習部落の山林の宅地（新屋敷地）については、永野（2022）参照。
- 6) 称号集団ブジャンガについては、永渕（2005：398, 415-418）参照。
- 7) タンカスは、出自の屋敷地にある大きな屋敷寺院を起源の寺院として共有する親族集団で、屋敷地の外にダディア寺院をもたないため、厳密な意味ではダディアではないというメンバーもいる。
- 8) 鏡味は、ギアニュール県ボナ慣習村のひとつの部落を事例に、1982年時点と1991年時点の部落内の婚姻率を比較している（2000：35）。それによると、1982年の慣習村内の婚姻は全婚姻中の75%、慣習部落内の婚姻は62%である。村外からの婚入者が増えた1991年時点でも慣習村内72%、部落内57%である。今日でもバリ・ヒンドゥーの通婚圏は出身部落内が多く、慣習村内の婚姻がそれに次いでいる。
- 9) バリ社会の男女の役割について、相互補完的か差別的かという議論がある。中谷は、ジェンダーに基づく区別以外に階層や年齢や出生順による差異化があることを指摘し、「バリ社会で、役割の区別があることがただちに男女の地位の差に結びつくとは考えていない」とする。そのうえで、出自や称号や財産の継承をめぐる父系制の原則や結婚後の住まいが夫方居住に定められているために、女性が不利な状況におかれ、しばしば多くの苦難を味わってきた問題を指摘している（中谷 2003：53-63）。
- 10) グヌンサリ・ウマカユ部落の屋敷地①については、永野（2022）で詳しく論じている。
- 11) バリ島外のバリ人ヒンドゥー教徒の火葬儀礼の不便を補うために、首都ジャカルタで形成されたヒンドゥー寺院とバンジャールについては、鏡味（2005, 2012）を参照。
- 12) 近年では行政上の住民登録している州都デンパサールの慣習部落のメンバーになり、葬送儀礼をするケースもでてきている（中谷 106-108）。
- iversity of Chicago Press
- Warren, C., 1993, *Adat and Dinas : Balinese Communities in Indonesian State*, Kuala Lumpur, Oxford University Press
- Geertz, H and Geertz, C., 1975, *Kinship in Bali*, Chicago, The University of Chicago Press. (H, ギアツ & C, ギアツ, 1989, 『バリの親族体系』みすず書房)
- 鏡味治也, 1992, 「ジャカルタのバリ人」『東南アジア研究』30巻3号, 315-330
- , 2000, 『政策文化の人類学』世界思想社
- , 2005, 「共同体性の近代」『文化人類学』540-555
- , 2012, 「首都に暮らすバリ人ヒンドゥー教徒」（鏡味治也編著）『民族大国インドネシア』木犀社, 285-311
- 齋藤綾美, 2009, 『インドネシアの地域保健活動と「開発の時代」』御茶の水書房
- 中谷文美, 2003, 『「女の仕事」のエスノグラフィー』世界思想社
- , 2012, 「都市の家族、村の家族」（鏡味治也編）著『民族大国インドネシア』木犀社, 79-115
- , 2014, 「バリ島農村の結婚事情」『アジア研ワールド・トレンド』No226, 14-17
- 永野由紀子, 2008, 「交錯するエスニシティと伝統的生活様式の解体」『グローバル・ツーリズムの進展と地域コミュニティの変容』（吉原直樹編）御茶の水書房, 131-175
- , 2012, 「インドネシア・バリ島の水利組合（スバック）における人間と自然の共生システム—タバナン県ジャティルイ村の事例—」『専修人間科学論集社会学篇』vol2, No2, 81-98
- , 2016, 「世界遺産登録後のバリ島ジャティルイ村の変化—慣習村間の対立と『多元的集団構成』」『専修人間科学論集社会学篇』vol6, No2, 27-41
- , 2022, 「バリ・ヒンドゥー村落における家族と屋敷地共住結合—タバナン県ジャティルイ村グヌンサリ慣習村の2つの部落（バンジャール）の事例—」『比較家族史研究』第36号, 56-88
- 永渕康之, 2005, 「宗教と多元化する価値：インドネシアにおけるヒンドゥーをめぐる境界線を定める闘争」『国立民族学博物館研究報告』29巻3号, 375-428
- 菱山宏輔, 2017, 『地域セキュリティの社会学』御茶の水書房
- 間苧谷榮, 2000, 『現代インドネシアの開発・社会変動』勁草書房
- 吉田禎吾編著, 1992, 『バリ島民』弘文堂

引用文献

Geertz, C., 1963, *Peddlers and Princes*, Chicago, The Uni-